

選評

河本真夕

ナバレーテ・エル・ムード《聖ヤコブの殉教》

——描かれた涙とエル・エスコリアル修道院聖具室との関連——

本論文は、スペイン国王フェリペ2世に重用された画家ナバレーテ・エル・ムードの代表作でありながら、現存史料の乏しさから必ずしも幅広い研究が行われてこなかった《聖ヤコブの殉教》について、斬新な解釈を提示するきわめて意欲的な論文である。河本氏は本作品に関して、これまでほとんど着目されることのなかったある細部への着目を出発点とし、設置場所での宗教実践やその空間の用途との関連性から、作品本来の宗教的機能を明らかにすることに成功している。

河本氏はまず、殉教する聖ヤコブの目に描かれた涙に注目するが、実見しなくては気付かないような細部への着眼は秀逸である。ついで河本氏は、本作品の着想源として、従来指摘されているイタリア絵画に加え、ネーデルラント絵画との関係を指摘する。聖人の顔貌表現、就中この涙の表現は、エル・エスコリアル修道院に所蔵されており、ナバレーテ自身が修復を行ったロヒール・ファン・デル・ウェイデンの《十字架降下》や《磔刑》に見られるものなのだ。そしてそのロヒールからの借用が、ナバレーテによって意識的に行われたと考えられることが詳らかにされていく。

本作品は、エル・エスコリアル修道院の造営初期において、一時的に設定された仮聖具室を飾るために制作されたが、河本氏は、聖具室の完成後にフェリペ2世の構想に従って設置された複数の絵画作品にも涙の表現が見られることを指摘する。そしてそれらの涙の表現が、フェリペ2世の周辺においては、神にとりなしを嘆願する特別の意味を有していたとともに、修道院聖具室という場の果たした宗教的機能、すなわち修道士たちに涙を伴う悔恨の意義を明示し、精神の浄化を促進する役割を担っていたとするのである。同時代の修道院長ホセ・デ・シグエンサによる記述やフェリペ2世宛ての書簡等、涙についての一次資料を引用し、また修道士たちの聖具室での所作にも目配りしつつ、本作品における涙の描写の意義を解明した本論文には、大きな説得力があるといえる。なお、紙幅の都合で難しかったと思われるが、同時代のイタリア美術、特にローマおよびナポリとの関係について踏み込んだ考察があれば、さらに充実した論考になったかもしれない。

全体として本論文の着眼はきわめて独自性の高いものであり、それがダイナミックな構想力によって見事に展開しており、美術史研究のすぐれた成果として高く評価できる。

以上により、河本真夕氏に『美術史』論文賞を贈り、その努力と功績を称えたい。